東京外国語大学論集 第 101 号（2020）
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES, AREA AND CULTURE STUDIES 101 (2020)

＜研究ノート＞

コロナ禍の首相記者会見に見られるパワー関係
―人称代名詞「皆さん」と「行為要求」の共起を中心に―

Power relations seen at the Prime Minister's press conference in pandemic
— Focusing on the co-occurrence of the personal pronoun *mina-san* (everyone) and 'request' —

谷口 龍子
東京外国語大学 大学院国際日本学研究院

TANIGUCHI Ryuko
Institute of Japan Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに
1. 理論的背景
2. 先行研究と研究設問
3. データ
4. 分析と考察
　4.1.　人称代名詞の使用
　4.2.　「皆さん」と発話行為「感謝」、「行為要求」との共起
おわりに

キーワード：コロナ禍、記者会見、批判的談話分析、人称代名詞、「皆さん」、発話行為
Keywords：Pandemic、Press conference、Critical discourse analysis、Personal pronoun、'mina-san(everyone)'、Speech acts

本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

要旨

本稿は、コロナ禍において 10 回にわたって行われた首相記者会見の冒頭発言の録音をもとに、発話者が受け手との力関係をどのように認識しているかという点について、批判的談話分析のアプローチで分析を行った。その結果、本データにおいて頻繁に使用されている「皆さん」の使用、ならびに、人称代名詞「皆さん」と発話行為「感謝」や「行為要求」との共起により、発話者が受け手との関係を区別化し、パワー行使が明示的あるいは暗示的に示されていることが観察された。

Abstract

This paper is a critical discourse analysis approach to how the speaker perceives the power relationship with the recipient, based on the recording of the opening remarks of the Prime Minister's press conference held 10 times in pandemic. As a result, it was observed that the speaker distinguishes himself from the recipient and explicitly or implicitly indicates the use of power by co-occurring the frequently used *mina-san* (everyone) with the speech acts "thanking" or "request".

はじめに

コロナ禍にあり、世界中の人々が社会生活を営む上で、あらゆるパラダイムの変更を余儀なくされている。東・東南アジアの一部の地域と異なり、過去に SARS や MARS などによる甚大な被害を受けていない日本社会の人々にとって、この状況は近年において前例のない苦難と言えよう。先が見通せない、終息が予想できない脅威に人々は大なり小なり不安を抱えている。

あふれる情報の中で情報操作やフェイクニュースが飛び交う現代、自分たちが今どのような状況にあり、どのような防止策を取ればよいのか、その手がかりを主要メディアや政府の知見に求めようとするのは当然のことと言えよう。人々はテレビや新聞などからできるだけ真実に近いと思われるものを選別し、感染の防止対策に役立てようと考えている。

一国の首相による記者会見に対して日本社会に住む人々が求めるものは、コロナ感染の状況に関する確かな情報、感染防止策、政府による対策の実践である。

安倍前首相（以下、発話者）によるコロナ感染に関わる記者会見は、計 10 回（2020 年 2 月 29 日～ 8 月 28 日）で、計 3 時間余り行われた [1)]。記者会見そのものだけでなく、ニュース報道番組の視聴率は軒並み上っている [2)]。たとえ、スピーチライターの存在が想定されていても記者会見における首相自らの発言の一字一句に対して日本社会の人々が強い関心を持っていることは明らかである。発言の内容如何では、翌日からの人々の行動様式が変わり得ることもある。

本稿は、当時の日本のトップリーダーの新型コロナウィルス対策に関する記者会見での冒頭発言のナラティブ分析を行うことにより、発話者が受け手との関係性をどのように認識しているのかという点について考察した。具体的には、使用頻度の高い人称代名詞の使用とそれと共起する発話行為にフォーカスを当てて分析を行った。なお、本研究の目的は、政府の政策内容や発言の内容そのものを批判するものではないことを断っておく。

1. 理論的背景

本稿では、批判的談話分析（Critical Discourse Analysis: 以下,CDA）の枠組みでこれまでに数々の政治ディスコースを研究している Fairclough のアプローチを参考に分析をおこなった。

Fairclough は、言語使用を社会的実践の一形態として捉え、権力の様相について、まず、以下の3つの次元 (dimensions, or stages) に区分している（Fairclough 2001:21-22）[3)]。

記述ステージ (Description):
　　テクストの形式的特性に関わるステージ
解釈ステージ (Interpretation):
　　テクストと相互作用の間の関係、または解釈プロセスの共有資源に関わる。
説明ステージ (Explanation):
　　相互作用と社会的コンテクストの関係、すなわち清算および解釈のプロセスの社会的決定、そしてその社会的効果にかかわる。

―フェアクロー(2008:29-30)

野村 (2017) は、そのうち、記述ステージについて、具体的な例を挙げて以下のように説明している。

「記述ステージでは、ディスコースにおいて人が発話や行為の「内容」を制約しているかどうか、相手との「関係」を制約しているかどうか、人々が担う社会的役割、あるいは「主体」の社会的位置づけを制約しているかどうかである。（中略）「内容」には「経験的価値」、「関係」には「関係的価値」、「主体」には「表現的価値」が対応している。経験的価値とは、ディスコースを発する人のこれまでの経験がディスコースの内容にどのように表れているか（その人の知識や信念など）を指す。関係的価値とは、そのディスコースにおいて社会関係がどのように表れているかを指す（「～君は」という敬称をつけて呼んでいれば、その人のほうが目上だ（と思われたい）という関係的価値の表れと言える）。表現的価値とはその人が対象をどのように評価しているかを指す。」

―野村(2017:264-266)

また、フェアクロー (2008) は、3 種類の価値について次のように説明している。

経験的価値は、単語がどのような分析体系に基づいているか、言い換えや繰り返しがあるか、文法においては、動作主を明示するかどうか、能動態か受動態かなどが指標として挙げられる。関係的価値としては、婉曲語法的表現があるか、モダリティの特徴、代名詞weやyouの使用とその範疇などである。表現的価値としては表現的モダリティの使用などが挙げられる。経験的価値は内容、知識や信念、関係的価値は関係および社会的関係と関わっている。また、表現的価値は主体および社会的アイデンティティと関わっている。

―フェアクロー(2008:134-172)を筆者がまとめたもの

さらに、これらの対応関係は図1）のように示される。

意味の次元 Dimensions of meaning	特性の価値 Values of features	構造的効果 Structual effects
内容 (Contents)	経験的 (Experiential)	知識／信念 (Knowledge/beliefs)
関係 (Relations)	関係的 (Relational)	社会的関係 (Social relations)
主体 (Subjects)	表現的 (Expressive)	社会的アイデンティティ (Social identities)

図1）形式的特性：経験的価値・関係的価値・表現的価値
―Fairclough(2001:94)、フェアクロー(2008:137)参考

本稿では、そのうち、関係的価値の指標となる人称代名詞の使用にフォーカスを当て、発話者が受け手との関係性をどのように認識しているのかを探る。

2.　先行研究と研究設問

近年、政治家たちの演説や談話は、政治学や社会学だけでなく、言語研究としても盛んに行われてきた。東 (2009,2010) は、社会言語学の分野で日本やアメリカの政治家たちの演説を取り上げ、Tannen が提唱したラポートトークとリポートトークによる分類、文末表現の使い分けや使用語彙の特徴などから、日米の政治家たちの弁術の特徴を比較している。政治ディスコースを対象とした研究は、談話分析を社会実践とする批判的談話研究によってとりわけ盛んに行われている。Fairclough(2001) は、マーガレット・サッチャー氏（当時英首相）のラジオインタビューの分析により、サッチャー氏と聴衆とのパワー関係を数々の指標から示している。出水 (2010) では、小泉純一郎氏の郵政解散演説を事例に、新自由主義という社会的コンテクストから分析を行っている。また、片岡 (2017) は、バラク・オバマ氏（前大統領、当時上院議員）による民主党党員集会演説をもとにその提示技能をマルチモーダルで分析、その効果を提示している。大久保 (2013) は、衆議院選挙における政治家たちの街頭演説に多く使われるゼロ型引用表現の分類を行っている。このように、政治ディスコースを題材とした研究は会話分析、談話分析やマルチモーダル分析などの分野において様々な研究の広がりを見せている。

政治ディスコースは、メディアを通して一般大衆に晒されるものである。一般の視聴者は、政治家による記者会見を自分たちの生活に必要な情報のリソースとして捉える。

本稿では、記者会見冒頭発話の発言の分析から、発話者が受け手[4]である視聴者たちとの関係性をどのように捉えているのかを探る。

研究設問は以下のとおりである。

① 記者会見での演説において、発話者は受け手との関係をどのように位置づけていると判断されるか。

② ①の根拠としてどのような言語的特徴がみられるか。

3. データ

安倍首相の公式記者会見[5]を官邸ホームページとテレビ録画で採取し、音声を文字化した[6]。計10 回にわたる公式記者会見の冒頭発言における主なトピックは以下のとおりである。

表1） コロナ禍における首相記者会見

会見の日付	発話時間（分）	発話文数	主なトピック
2020/2/29	19’00”	80	外出自粛要請→**学校臨時休校要請の報告**→エッセンシャルワーカーへのねぎらい→経済面での緊急対応策実施の明言→ダイヤモンドプリンセス号における患者の状況報告→ PCR 検査実施の状況報告→治療薬への言及
2020/3/14	19’00”	49	コロナウィルス感染症に関する特別措置法改正案成立の報告→緊急事態宣言を発出せずの明言→専門家による現況評価→マスク配布開始報告→ 3 密下における社会活動の奨励→卒業生への祝福→雇用調整助成金の実施報告→日本経済、地域経済への対応意思の表明→医療提供体制の必要性明言→他国との連携→クルーズ船乗客への検疫対応終了報告
2020/3/28	20’00”	91	海外の感染状況との比較→東京都ほか外出自粛要請への協力のお願い→政府対策本部設置の報告→渡航、イベント開催自粛要請→治療薬承認状況説明→来年度予算成立の報告→中小企業への対策説明→東京オリンピック開催延期報告
2020/4/ 7	24’47”	116	エッセンシャルワーカーへの慰労→医療機関の限界についての言及→**1 都1府5 県への緊急事態宣言発出**→外出自粛の呼びかけ→感染者数の推移と予測→外出自粛の呼びかけ→中小企業への経済対策の提示→緊急事態宣言の詳細説明→移動、外出自粛のお願い→ワクチン、治療薬の開発状況説明→民間の感染対策への工夫例示→東日本大震災の克服についての言及
2020/4/17	18’01”	87	個々の感染予防対策へのお礼→感染者数増加の報告→外出自粛の呼びかけ→**緊急事態宣言区域拡大（全国対象）の報告**→拡大理由の説明（クラスター発生等）→ 10 万円給付金の表明→事業者 / 観光業者 / 飲食業者への支援表明→エッセンシャルワーカーへのねぎらい→外出自粛協力依頼
2020/5/4	22’39”	115	国民への感謝表明→感染者減少の報告→国民への感謝→医療現場の過酷な状況説明→**緊急事態宣言の延長表明**→雇用調整助成金の表明→国民の協力への感謝→詳細な感染予防策ガイドライン策定の表明→検査体制拡充、保健所の体制強化の意思表明→治療薬開発の状況方向→医療従事者差別への憂慮表明→国民の外出自粛協力への感謝→第二波発生への懸念表明→感染防止策に対する国民の協力のお願い
2020/5/14	21’21”	109	感染状況、医療提供体制、監視体制に関する基準策定報告→感染者減少の報告→**緊急事態宣言解除**（39 県）→感染者減少の報告→感染予防のためのガイドライン策定の報告→解除地域の住民へのお願い→ 2 次補正予算編成着手の意思表明→中小企業向け持続化給付金開始の報告→ PCR 検査体制拡充の報告→治療薬承認の状況報告→国民への感謝
2020/5/25	21’55”	102	感染症犠牲者へのお悔やみ→**緊急事態宣言解除宣言**（全国）→エッセンシャルワーカーへの感謝→感染状況について他国との比較→イベント関係拡大方向の表明→事業者支援の約束→アプリ導入予定の表明→ PCR 検査体制拡大の意思表明→医療、介護従事者への給付金付与の意向表明→高機能マスクや防護具などの配布強化の意向表明→水際対策の強化の意思表明→他国への協力の意思表明→民主主義、基本的人権、法の支配の堅持表明→ G7 サミットにおける途上国のための特許権プールの創設提案の意向表明→国民への協力感謝

2020/6/18	19'36"	91	国会議員逮捕についてのお詫び→新型コロナウィルス発生（於武漢）からこれまでの経緯回顧→特措法成立について野党への感謝→ PCR 検査対象拡大の報告→接触確認アプリ導入（翌日より）の説明→唾液による PCR 検査の紹介→社会経済活動本格化の表明→入国時の PCR 検査実施の表明→未来投資会議の紹介→憲法改正条文作成の報告→安全保障環境での緊張度の高まり→安全保障会議での議論の必要性の強調
2020/8/28	12'28"	58	国民、医療従事者への感謝→検査能力拡充の必要性強調→予備費による今後の感染防止対策について詳細説明 第一次安倍内閣への言及→持病悪化の報告→総理大臣職辞任の表明→国民への感謝→自民党による今後の政策推進への確信→国民への感謝

4.　分析と考察

すべてのデータの中で使用頻度の高い実質語を抽出したところ、本データの中で最も使用頻度が高かった語は、新型コロナウィルスに関連する語「感染」「検査」などであった。感染拡大あるいは軽減の状況について報告したり、感染対策、感染者、医療関連の語が頻繁に使われていることは当然であろう。

しかし、新型コロナウィルス関連の語と並んで突出して使われている語が人称代名詞「皆さん」（「皆様」も含む）であった。表 2) を参照されたい。

表2)　使用頻度の高い語

	2/29	**3/14**	**3/28**	**4/7**	**4/17**	**5/4**	**5/14**	**5/25**	**6/18**	**8/28**	**合計**
皆さん	16	20	15	32	37	39	26	18	12	14	**229**
感染 [7)]	20	19	26	17	19	30	32	29	17	4	**213**
検査 [8)]	12	0	0	1	3	1	10	3	12	3	**45**

4. 1.　人称代名詞の使用

データに使われた主な人称代名詞には以下のようなものがある。表 3) を参照されたい。その中でも「皆さん」の使用が突出していることが一見してわかる。

表3)　主な人称名詞

	2/29	**3/14**	**3/28**	**4/7**	**4/17**	**5/4**	**5/14**	**5/25**	**6/18**	**8/28**	**合計**
皆さん	16	20	15	32	37	39	26	18	12	14	**229**
方（方々）	3	0	2	2	5	6	0	1	0	6	**25**
私	1	3	2	5	2	2	2	2	7	3	**29**
私たち	1	1	3	8	8	11	3	5	1	0	**41**

フェアクロー (2008:157) は、一人称代名詞や二人称代名詞の選択がパワーや結束関係と結びついていることに言及している。

日本語の「我々」や「私たち」には、場面によって、包括的 (inclusive) に使われる場合と排他的 (exclusive) に使われる場合がある [9)]。

周知のように「皆さん」は、通常二人称として使われる。田窪 (1997:13) は、「日本語では、対話において発話者自身を表す単語「私、僕」など、受け手を表す単語「あんた、君、おまえ」等、一、二人称を表す名詞類は存在するが、これらは閉じた類ではなく、人称による一致が存在しない日本語では、文法的に代名詞として別にたてる理由はない。また、これらのうち聞き手を表す語類は使用に制限があり、基本的に目上の相手には使うことができない」としている。日本語では、話し言葉において一人称名詞や二人称名詞を使用する場合は有標となる場合が多い。しかしながら、本データでは、10 回の冒頭発言のすべてにおいて、「皆さん」の単独使用、または「皆さん」を含む句が頻繁に使われていた。

表 4) は、「皆さん」の使用頻度と修飾要素である。

表4）　「皆さん」の使用頻度と修飾要素

	2/29	3/14	3/28	4/7	4/17	5/4	5/14	5/25	6/18	8/28	計
皆さん / 皆様	1	5	3	11	13	6	6	2	2	0	**49**
国民の皆様・皆さん / 日本人とその家族の -	2	3	4	0	3	7	7	5	4	9	**44**
医療関係者の -/ 看護師の -/ 医師会の -	2	0	1	5	6	4	5	3	0	1	**27**
専門家の -	2	4	2	2	1	6	1	1	1	0	**20**
中小・小規模事業者の -	2	2	2	3	0	1	3	5	0	0	**18**
陽性の -/ 感染者の -/ 入院患者の -	3	0	1	2	1	2	1	1	0	0	**11**
事業者の -/ 企業の -	1	0	0	0	6	1	1	0	1	0	**10**
{動詞} [10)] ー	0	0	0	3	0	5	2	0	0	0	**10**
{職業} [11)] の -	0	0	1	3	3	1	0	0	0	0	**8**
高齢者の -/ 若い -	0	1	0	2	0	0	0	0	0	3	**6**
保健所の -	0	0	0	0	3	1	0	1	0	0	**5**
{地域} [12)] の -	0	0	1	0	0	3	0	0	1	0	**5**
介護施設の -/ 保育所の -	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	**3**
野党の -/ 与野党全ての -	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	**3**
学生の -/ 卒業生の -	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	**2**
児童生徒の -/ お子さんの -	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	**2**
保護者の -/ ご家族の -/ 消費者の -	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	**3**
教育現場の -/ 教員の -	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	**2**
ご遺族の皆様	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	**1**
合計	**16**	**20**	**15**	**32**	**37**	**39**	**26**	**18**	**12**	**14**	**229**

「皆さん」は二人称として文の主語として使われ、「呼びかけ表現（address term）」としても使われることがもっとも多かった。しかしながら、「専門家の -」は、「専門家の皆さんによると…」「専門家の皆さんにアドバイスをいただいて…」のように、すべてが三人称として使われていた。

一方、「私たち」の使用は少ないが、発話者と視聴者を含めた総称として使われることが多かった。

例 1)
Line 70　今、私たちが最も、《少し間》恐れるべきは、恐怖、それ自体です。　-(0407)

例 2)
Line 109　'9 年前、私たちは、あの、東日本大震災を、経験しました。　-(0407)

次の例 3）では、発話者が視聴者と同じ立場であることを強調している。しかし、その前提として視聴者が発話者を同じ立場であると認識していないだろうという推測をふまえた発言であり、発話者と視聴者の区別化が通底にあることがわかる。

例 3)
Line 72　ウイルスという見えない敵に、大きな不安を抱くのは、私も、皆さんと同じです。-(0407)

また、例 4）では、発話者が、視聴者と一緒になって医療現場の従事者に感謝することで、視聴者との連帯感を示そうとしている。

例 4)
Line 75　えー現実に必死で立ち向かっている、現場の皆さんに、私たちは、心からの敬意と、感謝の気持ちを、表すことが、できます。　-(0407)

4. 2. 「皆さん」と発話行為[13]「感謝」、「行為要求」との共起

本データから、「皆さん」は、発話行為としての「感謝」や「行為要求」を表明する対象として頻繁に使用されていることがわかった。

例 5) は、感染防止策に協力してもらったことに対する感謝の表明である。

例 5)
Line 9　' 目に見えない、恐ろしい敵、との闘いを、支えてくださっているこうした、全ての皆様に、心より、御礼を申し上げます。　-(0417)

次の例のように、国民への感謝の表明も頻繁に行われている。

例 6)
Line 10　' これは、国民の皆様、お一人お一人が強い意思を持って可能な限りの、努力を、重ねて、くださった、その成果であります。
Line 11　' 協力してくださった、全ての国民の皆様に、心から、感謝申し上げます。
-(0504)

記者会見の冒頭発言で感謝が示される回数は「感謝します /- 致します /- 申し上げます」「ありがとうございます /- ございました」などを加えると 28 回に及ぶ。感謝は、医師、看護師、保健所の従事者、国民などが対象となる。

表5） 発話行為「行為要求」と「感謝」の出現回数

	2/29	3/14	3/28	4/7	4/17	5/4	5/14	5/25	6/18	8/28	計
行動要求	4	7	7	13	4	5	7	2	0	0	**49**
感謝	3	4	0	2	3	6	3	3	1	3	**28**

山梨 (1986) は、Searle (1969) の発話行為理論をふまえて、発話行為「感謝」を次のように定義している。

{感謝}

1. 命題内容条件 : P は x による過去の行為
2. 準備条件 : x は自分の行為が y にプラスであると信じている
3. 誠実条件 : x は y の行為に恩を感じている
4. 本質条件 : y の行為に対する x のその気持ちの表出

つまり、感謝の表明は、行為を行う側と行為を受ける側という二項対立を前提として行われることになる。

感染予防のためにマスクをしたり、外出を自粛するのは、自分や家族、さらに周囲の人々に感染させないことが一番の目的であるのだが、発話者は日本社会におけるトップリーダーとして国民と対峙し、国民の行為に政府の立場から感謝をしていることになる。

また、発話者は、行為を要請する対象として「皆さん」を多用している。

例 7)
Line 43 ' 既に、自分は感染…者かもしれない、という意識を、特に、若い皆さんを中心に、ま
全ての皆さんに、持っていただきたい。 -(0407)

次の例は、エッセンシャルワーカーに対して、継続した協力を要請する場面である。

例 8)
Line 81 ' 高齢者の、介護施設や、保育所、などで働いておられる皆さんにも、サービスを必要とする方々のため、引き続き、御協力をいただくよう、お願いいたします。 -(0407)

これまでの考察から、人称代名詞「皆さん」が感謝の対象として提示されることで、発話者と受け手との区別化が示されていることが明らかとなった。さらに、「皆さん」と発話行為としての「行為要求」を共起させることで、パワー行使が示唆されていることがわかった。

おわりに

本稿において観察された研究設問への回答は以下のようになる。

設問①　記者会見での演説において発話者は受け手との関係をどのように位置づけていると判断されるか。

設問②　①の根拠としてどのような言語的特徴がみられるか。

設問①への回答

発話者は、受け手との区別化を提示している。また、パワーが上であると位置づけている。

設問②への回答

様々な対象に対して「皆さん」と発話行為「感謝」を共起させることで、受け手との区別化を明示し、「行為要求」と共起させることで、発話者と受け手とのパワー関係においてパワーが上であることを暗示している。

本研究の最終的な目標は、コロナ禍という非常時において日本社会の人々が記者会見からどのような情報を得ようとするか（あるいは得たか）という受け手側の視点からの研究を行うことである。その前段階として、発話者が受け手（本稿では視聴者）との関係性をどのように捉えているか分析を行った。

本データからは、人称表現についての日本語の特徴や指示対象の判断の難しさが確認できた。データで多く使われている「皆さん」が文において二人称、三人称の主語としても使われるだけでなく、呼びかけ語としても使われることから、聞き手を特定することが難しく発話の意図をわかりにくくさせている点も指摘される。

本稿は、記者会見での発話の文字化データをもとに、批判的談話分析の手法で発話者と受け手とのパワー関係について分析を試みた試論に過ぎない。視聴者が実際に体験するものは映像と音声で、一過性のものであり、すべての発話が視聴者の記憶にとどまることはない。翌日の新聞報道あるいは官邸ホームページで文字化されたものを確認する者は多くはないであろう。記者会見を受けて記憶に留まった事柄だけにより視聴者は翌日からの自分の行動を考える。したがって、記者会見での演説がどのような影響を及ぼしたかという検証は視聴者の記憶を辿ることになる。今後は受け手である視聴者の聞き取りをもとに分析を進めていく。

＊本研究は、基盤研究Ｂ「代名詞代用・呼びかけ表現の通言語的研究」（令和２年～５年：代表者斎藤スニサー、課題番号 :20H01255）、及び 2020 年度東京外国語大学国際日本学研究院競争的経費「コロナ禍におけるトップリーダーによる演説の画像および音声データのマトリックス化・文字化・翻訳作業」（谷口龍子）の成果の一部である。

注

1）総時間は演説のみであり、演説後の質疑応答は除く。

2）ビデオリサーチによると、安倍前首相による緊急事態宣言発出の記者会見 (4 月 7 日) の NHK ニュースの視聴率は 26.3 パーセントであった。（https://news.yahoo.co.jp/byline/suzukiyuji/20200409-00172360/ より。閲覧日時 2020 年 10 月 12 日 15 時）

3）Fairclough の理論の詳細については、Fairclough(2001)、フェアクラフ (2012) 等を参照されたい。

4）記者会見の受け手として、テレビの視聴者、記者会見場に同席している政府関係者、報道関係者が存在する。本稿ではそれらをまとめて受け手とする。

5）コロナ禍における安倍前首相の演説は 2020 年 2 月 29 日から 8 月 28 日の辞任演説まで計 14 回行われたが、そのうち 3 月 22 日於防衛大学、8 月 6 日広島被爆者追悼演説、8 月 9 日長崎被爆者追悼演説、8 月 15 日戦没者追悼演説の 4 件は、主に特定の視聴者を対象としていることから、本研究の分析対象としなかった。

6）文字化の規則は宇佐美まゆみ（2019）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）」https://ninjal-usamilab.info/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf に従った。

7）「感染する」「感染症」「感染対策」などを含む。

8）「検査体制」「検査キット」などの複合語も含む。

9）日本語で主語が省略されることは、Shibatani(1990) などで言及されている。

10）「手作りマスクを届けようとしている -」「自宅での時間を過ごしてくださっている -」「様々な場所で支えてくださっている -」など。

11）「製造、加工、物流、配送などに関わる -」「エアラインの -」「観光業の -」「飲食業の -」など。

12）「都民の -」「13 都道府県の -」「地元の -」など。

参考文献

東照二 2007 『言語学者が政治家を丸裸にする』文芸春秋

東照二 2009 『オバマの言語感覚』NHK出版

東照二 2010 『選挙演説の言語学』ミネルヴァ書房

出水純二 2010 「日本の新自由主義的政治ディスコース–小泉郵政解散演説の批判的談話分析を通じて–」『社会言語科学』第13巻第1号、pp.58-69

Fairclough, Norman 2001. *Language and power*(2nd ed). Harlow, Essex: Pearson ESL.（フェアクロー著、貫井孝典ほか訳 2008『言語とパワー』大阪教育図書）

フェアクラフ・ノーマン著、日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳2012『ディスコースを分析する社会研究のためのテクスト分析』くろしお出版

韓娥凜 2018 「日韓政治ディスコースにおける正当化ストラテジー：批判的談話分析による異文化間対照の試み」『阪大日本語研究』30、pp.41-69

官邸ホームページ　https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/statement/2020/0828kaiken.html　2020年8月31日最終閲覧

中田智子 1989 「発話行為としての陳謝と感謝-日英比較-」『日本語教育』68号、pp. 191-203

仲西恭子 2016 「豪紙 *The Age* の社説に見られる説得戦術–オーストラリア社会における庇護希望者の問題–」『ディスコース分析の実践 – メディアが作る「現実」を明らかにする』くろしお出版、pp.81-102

野村康 2017『社会科学の考え方　認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会

岡本多香子 2017「語りにおけるインタビュイーの自称詞使用　なぜ「おれ」は「パパ」になり「わたし」になったのか」『話しことばへのアプローチ－創発的・学際的談話研究へのあらたなる挑戦』ひつじ書房

大久保加奈子 2013「共有される他者のことば-選挙演説に用いられるゼロ型引用表現の分析-」『社会言語科学』第16号第1号、pp.127-138

Searle, J. R. 1969 *Speech Acts: An essay in the philosophy of Language*, Cambridge: Cambridge University Press.

Shibatani, Masayoshi 1990 *The Languages of Japan* (Cambridge Language Surveys), Cambridge : Cambridge University Press

田窪行則 1997『視点と言語行動』くろしお出版

富成絢子 2016「五輪サッカー報道にみられるジェンダーとナショナリズム－2012年ロンドン五輪の新聞記事分析－」『ディスコース分析の実践－メディアが作る「現実」を明らかにする』くろしお出版、pp.103-137

宇佐美まゆみ 2019「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）2019 年改訂版」https://ninjal-usamilab.info/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf

山梨正明 1986『新英文法選書12発話行為』大修館書店